2014年
12月4日
木曜日

ことばの宛て先

長谷川哲子　准教授（日本語教育学）

大学入学後、授業でのプレゼンテーション、レポート、論文等、自分の考えや意見を人に発表する機会がぐっと増える。一生懸命考えた文章に対して、分かりにくい、何が言いたいのか分からない等、うれしくないコメントをされることも、残念ながらあるかもしれない。私自身の研究分野として、留学生のライティングに関心を持っているが、特に、分かりやすい／分かりにくい文章とはどのようなものかということを考えている。それに関連して、以下では、相手に伝わる、メッセージが届く、というようなことについて、「宛て先」を一つのキーワードとして考えてみたい。

ふつう、自分が宛てた相手以外には、郵便物でもメールでも届かない。では、こんなケースはどうだろうか。向こうから人が歩いてきて自分に向かって手を振っているのだと思い、手を振り返したら、自分の後ろにいる人に向かって手を振っていたのだった、という場合である。確かに自分に向けられた挨拶ではないし、自分が宛て先ではなくても、実際には伝わってしまっていたり、受け止めてしまったりしていることがある。自分が宛て先だと自分で思ったのなら、自分が発信者の意図した宛て先であるかどうかに関わらず、メッセージは受け取れる、メッセージは届くということになる。

その反対に、届かないメッセージとはどのようなものだろうか。日ごろ自分が発信したり受け取ったりするものについて、どれぐらい宛て先を意識しているだろうか。話す相手や読む相手によって、ことば遣いを変えるのは、宛て先に対する意識の表れの一つである。では、学生のみなさんが書くレポートでは、どんなふうに宛て先をとらえているのだろうか。私の個人的な印象では、通り一遍のことや、キーボードをたたいて調べれば手に入る情報だけが書いてあるレポートは、内容は正しいのだろうが伝わらない、いわば宛て先のないレポートだと感じる。また〝言語明瞭意味不明〟のような場合にも、ことば遣いは正しくても何が言いたいのか届いてこない。少し違う例では、読まずに即座に捨てるような迷惑メールやダイレクトメールも宛て先のないメッセージの一種ではないだろうか。

レポートを書く際に、自分は何を誰に伝えたいのか、考えてみるのはもちろんである。その際に、レポートの宛て先として、その授業を担当している教員だけに限らず、扱っているテーマの当事者や関係者、もっとそのテーマについて知ってほしい人など、様々な宛て先を想定してもよいのではないか。宛て先を意識することは、とりもなおさず、相手の立場に立って考え、相手を慮ることである。そのためには、自分の知識や経験を駆動して想像力を働かせることが不可欠である。そうした過程を経た宛て先を携えているメッセージは届くのだと思いたい。■